# オットー・ブラーム
# 「現代生活のための自由舞台―創刊の辞」[1)]

Otto Brahm, «FREIE BÜHNE FÜR MODERNES LEBEN Zum Beginn» (1890)

我々は雑誌「現代生活のための自由舞台」[2)] を始めようと思う。

この試みの中心に置かれるのは芸術。現実を、今現在の実存を見通す、新たな芸術である。

かつてあったのは、目の前の現実から目をそらし、いにしえの薄暮の中にポエジーを求め、顔を上げずに現実逃避し、ありえぬものごとが永遠の若さの中で花開くような遙かな理想の地を追い求める、そんな芸術だ。今日の芸術はその触手を伸ばして[3)]、そのなかに生きとし生けるものすべてを、自然と社会を取り込んでいく。現代芸術と現代生活とはきわめて密接かつ繊細に相互作用しつつ結びつき、そして前者を把握しようと思う者は、後者をその溶け合う無数の線に、交錯し互いに角突き合わせる生の欲動に身を浸しつつ、生き抜こうと努めねばならない。

時代の精神的指導者たちが黄金の文字で旗印に掲げる新たな芸術のスローガンは、ただ一言、真実だ。生のあらゆる小道にあり、我々が必要とし得ようと努めるもの。闘う者の目に映らぬ客観的な真実ではなく、心の底からの確信より自由に産み出され表現される、個的な真実。何も美化せず隠蔽しない、自主独立した精神の、真実。そのような精神が知る不倶戴天の敵は、あらゆる姿をとった嘘である。

ほかのどんなプログラムも、この雑誌「自由舞台」に書かれることはないだろう。紋切り型に頼ることなどしないし、永遠に運動を続けるものを、生と芸術を、慣習の軛に縛りつけることなどもしようと思わない。生成しつつあるものこそ、我々の企てにふさわしい。視線は来るべきものに向けられるのであり、不遜にも人間の果てしなき可能性を慣習や規則に永遠に閉じ込めんとする類いの時代錯誤は、願い下げだ。我々は過ぎ去った時代を今日に伝える偉大なものすべてに、心から敬意を表する。しかし過去から現存在の規範を得ることはないのだ。没しゆく世界を眺めつづける人間ではなく、現時点での諸要求を身体の深いところで自由に感じとる人間だけが、時代の律動する精神的諸力を、現代の人間として、見抜くのである。

闘いの日々のなかで耳を大地に近づける者は、やって来つつあるがいまだ見えぬものの響きを聞き取るだろう。我々もまた、開かれた感性を携えて、創作衝動と生成の欲望に満ちた時代のただなかで、秘密に満ちた来るべき未来の声に、沸き立つ無秩序のなかで押し寄せる新たなものに、耳を傾けたい。理論の遮断棒も、過去の列聖された規範的モデルも、我らが世代の本質たる果てのない発展を、押しとどめはしない。

新たなものが喜びに満ちた呼びかけとともに歓迎されるところでは、精神のあらゆる武器を用いた古き私闘が予告される。いまだ生命を持つ古きものも、人間の偉大な導き手も、我々にとっての敵ではない。だが死した古きもの、硬直した規則、身につけたブッキッシュな知識を振り回して今生まれつつあるものの行く手を阻む息絶えた批評、それらこそ、我々の戦闘宣言が向けられるべき相手である。相手と言っても、ここでは人ではなく事柄のことなのだが、しかし古き者たちと若者との間に見

1)［訳注］翻訳に際しては以下を底本とした。Otto Brahm, *Kritiken und Essays*, Zürich, Artemis Verlag, 1964, pp. 317–319.

2)［訳註］「Freie Bühne für Modernes Leben 現代生活のための自由舞台」誌は、1890 年、S. フィッシャーとブラームにより、自然主義演劇・文学を担う世代が集う場として創刊された週刊誌。1894 年に「ノイエ・ドイチェ・ルントシャウ（新ドイツ展望）」として月刊化、1904 年に「ノイエ・ルントシャウ（新展望）」と改称され、現在も季刊の総合文芸誌としてフィッシャー書店から刊行が続けられている。原注に、パウル・シュレンターとゲーアハルト・ハウプトマンの、この雑誌の創刊を語る言葉が掲載されている。

パウル・シュレンター：「『自由舞台』には、自由な発言の場が欠けていた。ある晩、私たちはポツダム通りにあるワイン酒場〈フリードリヒ〉に陣取り、そのことを嘆き合っていた。そのときユリウス・シュテッテンハイムが彼独特の若々しく情熱的な声で発した言葉に、一同、光明を見た気がしたものだ。シュテッテンハイムはこれまで数度、雑誌の創刊に関わったことがあり、当時も「Wespen スズメバチ」誌で存分に鬱憤晴らしをしていたのだが、彼の言うには、障害を取り除く唯一の手段は、自分たちの週刊誌を持つことだ、と。このアイディアは、我々の心にしっかり根を張った」。

ゲーアハルト・ハウプトマン：「私も関わっていた自然主義の運動に関して、当時ほとんど言及されることがありませんでした。「自由舞台」協会会長のオットー・ブラームが、協会と同じ名前を持つ雑誌を創刊したのです。「現代生活のための自由舞台」という名前でした。私のふたつ目の戯曲『平和祭』は、上演に先だってこの雑誌に掲載されました。私のアドバイスにより、出版者はアルノー・ホルツに編集を委託しました。」

3)［訳注］ドイツ語は“mit klammernden Organen”、ゲーテ『ファウスト』第一部 1115 行にある表現。

解の対立が生じ、人と対面することなしに事柄と対決などできないとすれば、我々は開かれた感性を持って、座して得た権威におもねることなく、我々世代の要求のために闘うつもりである。そしてこの小雑誌は今生きている者に向けて、いまだ定かでない目標へと歩みを進める者に向けて差し出されるのであるから、新鮮でみずみずしい才能を持つ若者たちを我々の周囲に集わせるように努めたい。驕り高ぶった無能だけは御免蒙りたい。それは騒々しくでしゃばって、良きものごとを歪ませてしまうからだ。新たな芸術に形だけ同調する哀れな人間や、新たな芸術の成果をかすめ取ろうとする人間に対して、盲目に騒ぎ立てる敵対者に対するのと同じくらいに、我々は闘いの準備を整えているのである。

現代の芸術がその若々しい芽を息吹かせるとき、その根は自然主義の大地に伸びている。現代の芸術は、この時代の内的衝動に従いつつ自然の生の力を認識することへと向かい、真実への荒々しいまでの欲求を持ちながら、我々にありのままの世界を見せてくれるのだ。自然主義を友として、我々は遙かな道のりをともに歩んでいこうと思う。その遍歴の旅の途上で、今日いまだ見通せぬ地点において突然道が折れ、芸術と生において驚くべき視界が新たに開けてきたとしても、我々はそれを平然と迎えよう。人の文化の果てしない発展は、いかなる定式とも、たとえそれが最新のものであっても、結びついていないのだから。そしてこの確信のもとに、永遠に生成しつづけるものへの信頼のもとに、「現代生活のための自由舞台」を我々は始めたのである。

1890 年 1 月 29 日

（訳：本田雅也）